

# イタリアにおける漢籍の蒐集

高田時雄

イタリアは古くから中國と深い関係がある。マルコ・ポーロはしばらく措くとしても、十六世紀末からルッジエリやリッチ等イタリア系のイエズス會宣教師によって始められたカトリックの中國布教とそれに付隨して行われた中國研究を回顧するとき、イタリアは紛れもなくヨーロッパ中國學發祥の地と稱してもよい。しかしヨーロッパの中國學の中心はやがてフランスに移り、近代に入ってもイギリス、ドイツなどが積極的に中國研究を押し進めたのに對して、イタリアはほとんど専門の學者を生み出し得なかった。それはもとより近代統一國家への脱皮が遅れたため、國家として充分に中國學を組織できなかつたことが大きい。しかしローマは何といつてもカトリック教會の大本山であり、宣教師自身やそのパトロンであるスペイン・ポルトガル王室による獻納などさまざまな経路によって、早くから多くの文獻が持ち込まれていた。それらはヴァチカンや布教聖省(Propaganda Fide)そして布教に従事した修道會の本部などに傳承されてきたのである。さらに遅ればせながらイタリアに統一國家が成立すると、フィレンツェやローマなどの大學で中國學の講席が設けられるようになり、その擔い手たちによって盛んに漢籍の蒐集が始められる。

かくして現在イタリアに保存される漢籍は、初期布教史とともにもたらされた明末の刻本など古い層の書物と、近代以降の新しいイタリア中國學の擔い手たちによる蒐集と、大きく二つに分けることが出来る。ただこうしたイタリアの漢籍蒐集については、英仏あるいはオランダ、ドイツ、オーストリアの図書館に所蔵される漢籍にくらべて、あまり知られていないのが現状であろう。筆者はここ六・七年のあいだ、幸いにほぼ毎年イタリアに赴き、約二十箇所ほどの図書館で漢籍の調査を行ってきたので、これらの蒐集に關して大體の感觸をつかむことが出来たと考えている。調査の結果の全貌はやがてイタリアの同僚と共同でイタリア所在漢籍連合目録として公にされるはずであるが、それに先だつてイタリアの漢籍所藏機關とその蒐集をごくかいつまんで紹介しておこうと思う。

まず最初に取り上げるべきは當然ヴァチカン圖書館ということになるかも知れない。しかしヴァチカンは地理的にはイタリアにあるものの政治的にはイタリアに屬さないのので、ここで取り上げることをしない。ヴァチカン圖書館の中國關連蒐集については以前短い文章を書いたことがあるので<sup>1</sup>、出来ればそちらを御覽い

<sup>1</sup>「ヴァチカン圖書館の中國關連蒐集について」『日佛東洋學會・通信』第二〇號(一九九五年十二月)頁三~六。

ただきたい。またヴァチカン所蔵漢籍には古くポール・ペリオの作った簡目（一九二二）があり、それ以後のものについては筆者の補編があって、ほぼその全容を知ることが出来る<sup>2</sup>。

ただヴァチカンに関連する事柄として若干補足すると、一六二二年、グレゴリオ十五世によって創設された布教聖省には、バルベリーニ文庫やボルジア文庫など名家の所蔵書が歸しており、その中には他のアジア諸國の文獻に伍してかなりの數量の漢籍が含まれていた。これらの文庫には古い時期の傳來品が少なくない。またボルジア文庫には十九世紀初、レミュザやクラブロート等とともにヨーロッパ中國學草創期に活動したイタリアの中國學者アントニオ・モントゥッチ（Antonio Montucci, 1762-1829）の所蔵した漢籍全部が入っている。これらの書物は一九〇二年にヴァチカン圖書館に移管されたため、現在ヴァチカンにあるが、殘餘の漢籍は布教聖省附設コレージョを引き繼いだ現在のウルバニアナ大學（Pontificia Università Urbaniana）に收藏されている。數量的にはかなり多いが、出版年代は清末から民國にかけてのものがほとんどで、見るべきものは少ない。

バチカンを除けば、イタリア最大の漢籍收藏機關はローマ國立中央圖書館（Biblioteca Nazionale Centrale）である<sup>3</sup>。その東洋部（Sezione Orientale）が所蔵する漢籍は一五〇〇タイトル、一五〇〇〇冊というから、おそらく數量的にはバチカンを凌駕している上に、相當な珍本も存在する。なかでも一八三七から四七年まで中國で代牧を務めたルドヴィコ・デ・ベージ（Ludovico de Besi）が將來した劉文泰『本草品彙精要』の彩色圖入り鈔本などはこの圖書館の漢籍を代表するものといってもよく<sup>4</sup>、イタリアでも七〇年代に部分的複製が作られているが、何年前に日本で全冊の影印版が出現した<sup>5</sup>。

實はこの圖書館はイタリア統一後、イエズス會の學院であったローマ學院（Collegio Romano）の圖書館を接收して出來たものである。そのためイエズス會の持ち傳えた書物が多くここに傳來し、イエズス會が中國で刊刻した書物について調査するためには、ヴァチカン圖書館、フランス國立圖書館とならんで重要な存在となっている。今日、イエズス會の本部には別に文書館（ARSI: Archivum Romanum So-

---

<sup>2</sup>ペリオの簡目はタイプ打ち原稿で、漢字も使われておらず、非常に使いにくいものであったが、數年前、筆者により改訂編集のうえ正式に出版された。Paul Pelliot, *Inventaire sommaire des manuscrits et imprimés chinois de la Bibliothèque Vaticane*, revised and edited by Tokio Takata, Italian School of East Asian Studies, Reference Series 1, 1995, Kyoto. Tokio Takata, *Supplément à l'Inventaire des livres chinois de la Bibliothèque Vaticane*, Documentation Center for Oriental Studies Series 7, 1997, Kyoto（高田時雄編『梵蒂岡圖書館所藏漢籍目錄補編』、京都大學人文科學研究所東洋學文獻センター叢刊第七冊）。

<sup>3</sup>ローマ國立中央圖書館の中國蒐集については、同圖書館の東洋部門主任である Marina Battaglini 女史による *I fondi orientali della Biblioteca Nazionale: le collezioni cinese e giapponese, Le fonti, le procedure, le storie: raccolta di studi della Biblioteca*, Roma, Biblioteca Nazionale, 1993, 35-44 を見よ。また同著者の *Old Chinese Books: Reclaiming a Neglected Heritage, Ming Qing Yanjiu*, Napoli-Roma, 1996, 13-27 はイタリアの漢籍蒐集全體の要領を得た概観である。

<sup>4</sup>詳細は G. Bertuccioli, Nota sul Pen-ts'ao P'in-Hui Ching-Yao, in *Rivista degli Studi Orientali*, Vol. 29 (1954), 247-251.

<sup>5</sup>一九九七、東京、科學書院刊。

cietatis Iesu)が存在し、その海外布教に関する大量の文書を保存していることは衆知の事実で、リッチをはじめとするイエズス會士たちの貴重な報告や書簡がその中に存在するのだが、中に少数の漢籍が紛れ込んでいることはあっても、基本的に漢籍の数は非常に少ない。それらはすべてこのローマ国立中央圖書館に歸しているわけである。

この圖書館の漢籍の來源はイエズス會のローマ學院だけではない。他の會派、例えばフランシスコ會に屬するアラシヨエリのサンタ・マリア教會( Chiesa di Santa Maria in Aracoeli )の舊藏書にもしばしばお目にかかる。フランシスコ會が中國で出版した書物の組織的な研究はまだ存在しないから、こういった材料の整理が待たれるところである。

この圖書館には教會關係以外からも、漢籍が流れ込んでいる。ローマ大學で日本文學を中心に極東の言語文學を講じたカルロ・ヴァレンツィアーニ( Carlo Valenziani )所藏の和書漢籍が、同氏の死去の年、一八九七年までに、何度かに分けて購入乃至寄贈された。また同じくローマ大學で中國學を講じていたロドヴィコ・ノチェンティーニ( Lodovico Nocentini )は、義和團事件に際してイタリア軍が鹵獲した漢籍約六〇〇〇冊をローマ中央圖書館にもたらす上で大きな貢獻をした。これらの書物の中には多くの見事な装本の殿版が含まれているが、中には軍靴に踏みにじられた痕をまざまざと留めるものもあり、歴史の悲哀を感じさせる。ノチェンティーニはまた西徳二郎の『中亞細亞紀事』(一八八六)のイタリア語譯を作った人でもある<sup>6</sup>。同じく義和團の時の戦利品で北京のイタリア領事館に保管されていた二六〇〇冊も、當時領事館の通譯であったグイド・ヴィターレ( Guido Vitale )の斡旋で、ローマ中央圖書館に入った。ヴィターレは後にナポリ東洋大學で教えることになる。彼等はみなイタリアの新しい世代の中國學者であった<sup>7</sup>。

ローマ中央圖書館所藏漢籍の中で、今日から見てむしろ興味を引くのは、南音など廣東俗曲類の小冊子がまとまって収蔵されていることであろう。合計百數十種、同一書がかなり重複しているので、冊数は三五〇餘に及ぶ。多くが廣州の廣文堂の出版物で、片々たる薄冊であるが、古いものでは時代が嘉慶年間にまで遡るから、この種の資料としては非常に珍重すべきものといえよう。出来るだけ早い時期に詳細を公にしたいと考えている。

ローマ中央圖書館がイエズス會のローマ學院に由來するように、統一イタリア國は一八七三年、法律によって修道會の機構を解散させ、結果、その經營になる圖書館は國立機關に編入された。カサナテンセ圖書館( Biblioteca Casanatense )も

<sup>6</sup> *L'Asia Centrale. Note di viaggio e studi di un diplomatico giapponese*, Torino, UTET, 1911. 榎一雄「中央アジア旅行記」『榎一雄著作集』第二卷(一九九二、東京)頁四二六~四二八(もと『日本古書通信』四五三號(一九八二年一月)を見よ。

<sup>7</sup> 彼等を含めたイタリア中國學の歴史については、G. Bertuccioli, *Gli studi sinologici in Italia dal 1600 al 1950*, *Mondo Cinese*, n.81(marzo 1993), 9-22. (英語版は *Sinology in Italy 1600-1950*, *Europe Studies China*, Papers from an International Conference on The History of European Sinology, London, 1995, 67-78) が要を得ている。また Angelo de Gubernatis, *Materiaux pour servir a l'histoire des etudes orientales en Italie* (Paris-Florence-Rome-Turin, 1876) 367ff. を参照。

例外ではない。この図書館はもとジロラモ・カサナテ樞機卿（一六二〇～一七〇〇）によって創設された図書館で、ドミニコ會の僧院に附設されていた。早くから一般にも公開するとともに、藏書の擴充、目録の整備に勤め、十八世紀の後半にはヴァチカンに次いでローマ最大の図書館に發展した。わが國ではキリシタン版の『さるばとる・むんぢ』（一五九八年長崎刊）や『どちりな・きりしたん』（一六〇〇年長崎刊、國字本）を所蔵することで知られている。中國關係でいえば、布教聖省の廣東駐在員であったジュゼッペ・チェルー（Antoine Cerù）が残した文獻、パリ外國傳道會のアントワーヌ・ギーニュ（Antoine Guignes）の藏書、さらに同じくパリ外國傳道會のメグロ司教（Charles Maigrot）そして教皇の特使メツザバルバ（Carlo Ambrogio Mezzabarba）の寄贈書などが伝えられている。彼らは皆イエズス會の適應主義を強く非難し、史上に名高いいわゆる典禮問題を引き起こした一方の當事者たちである。版本の上では特に目立ったものはないとはいえ、カトリック中國布教史の補助資料としては極めて興味ある材料といえよう。最近、同図書館の漢籍についてリストが公表されている<sup>8</sup>。

同様にもとアウグスチヌス會の図書館であったアンジェリカ図書館（Biblioteca Angelica）にも、少數ながら貴重な中國關係資料が所蔵されているが、漢籍と呼ぶべきものは嘉靖辛亥年（一五五一）刊の『新刊四明先生高明大字續資治通鑑節要』一點のみである<sup>9</sup>。

イタリアには国立図書館がたくさん存在する。これも歴史的経緯があつてのことなのだが、ローマ以外に、フィレンツェも国立中央図書館を名乗っている（Biblioteca Nazionale Centrale di Firenze）。しかしこの図書館の漢籍收藏は全部で二十數點、ローマと比べるとその數量は問題にならない。その數少ない漢籍の中で有名なのは、この地の生んだ大旅行家フランチェスコ・カルレッティ（Francesco Carletti）が所蔵していた萬曆二十三年刊汪縫預等『廣輿考』であろう<sup>10</sup>。他には善本の範疇に入るものとして、嘉靖三年司禮監刻本の『文獻通考』三百四十八卷の完帙があり、同じく明刻本の王『農書』（ただし「農器圖譜」のみ）がある。

ナポリ国立図書館（Biblioteca Nazionale Vittorio Emanuele III di Napoli）もフィレンツェとほぼ同じ數量の漢籍を所蔵する。やや目立つのは「書林拱秀堂劉蓮台梓行」の牌記を有する『周易本義』で、モロッコ革の見事な装本には名門ファルネーゼ家（Farnese）の紋章が刻印されている。おそらく古くスペイン經由でもたらされたものであろう。これらの漢籍には古くミオラ氏によって作成された手書きの目録が存在する<sup>11</sup>。

<sup>8</sup>Eugenio Menegon, The Biblioteca Casanatense (Rome) and Its China Materials, *Sino-Western Cultural Relations Journal*, XXII (2000), 31-55.

<sup>9</sup>不全、卷十九・廿のみ存。羊皮装。

<sup>10</sup>カルレッティ及びその旅行の詳細は、榎一雄「商人カルレッティ」、『榎一雄著作集』第六卷（一九九三、東京）頁三～二一五（もと『月刊シルクロード』第五卷第七號（一九七九年九月）～第六卷第九號（一九八〇年十一月）に連載、その後一九八四年十月大東出版社より單行本として刊行）を見よ。また『廣輿考』に関しては、榎一〇一頁に引用された海野一隆、ムッチョーリ兩氏の研究を参照。

<sup>11</sup>A.Miola, *Catalogo dei Mss. Orientali della Biblioteca Naz. di Napoli*, 1877.

その他、ミラノの国立図書館 ( Biblioteca Nazionale Braidense )<sup>12</sup>、ヴェネツィアの国立図書館 ( Biblioteca Nazionale Marciana ) にも、多くはないが漢籍が存在する。前者には萬曆の『古今列女傳』などやや古い書物がある。後者には漢籍の見るべきものはなく、むしろ何点かの滿文書がある footnote イタリアの滿文書にはスターリ氏の連合目録があって、これらを網羅している。Giovanni Stary, *Opere Mancesi in Italia e in Vaticano*, 1985, Wiesbaden.。その内の一点には、ポリグロットとして名高いヴェネツィア出身のオリエンタリスト、エミリオ・テザ ( Emilio Teza ) の藏印を捺してあるので、あるいは他の滿文書もこの人の舊藏書かも知れない。

シチリア地区中央図書館 ( Biblioteca Centrale della Regione Siciliana ) はイントルチェッタ ( Prospero Intorcetta 殷鐸澤, 1625-1696 ) の *Sapientia Sinica* ( 一六六二、建昌 ) 及び *Sinarum Scientia Politico-Moralis* ( 一六六七、廣州；一六六九、ゴア ) を所蔵することで知られている。ごく少数の漢籍もなくはないが、とりたてて言うほどのものではない。

フィレンツェのラウレンツィアーナ図書館 ( Biblioteca Medicea Laurenziana ) はメディチ家の図書館として名高い。ルネサンス期の図書館のおもむきをそのまま伝える、この図書館の古い書庫には、さすがに何点かの古渡りの漢籍が収蔵されている。崇禎刊の『宣和博古圖』( 三十卷中十四卷まで存 )、萬曆頃の富春堂刊『大觀本草』( 卷二十三のみ )、また恐らく明末刊の『文公家禮儀節』( 全八巻中、巻五～八存 ) がやや注意を引くが、なかでも崇禎六年の忠義堂刊の『新選合併明朝三春演義大全』は他に傳本を見ない珍書である。

中國學の講座を持つ大學は、多かれ少なかれ中國書を所蔵している。しかしヨーロッパ諸國の中で近代的な中國學の確立が遅れたイタリアでは、組織的繼續的な蒐書が難しかったようで、民國以降の出版物はともかく、いわゆる漢籍に数えられるような線装本古書の数是非常に限られている。しかし時には古い傳承の書物が、さまざまな経緯によって大學図書館に流れ込んでいる場合もないことはない。

大學図書館の中で數量的にもっとも豊富な漢籍を有するのはローマ大學 ( Università degli studi di Roma “La Sapienza” ) である。その文哲學部 ( Facoltà di Lettere e Filosofia ) 東洋學科 ( Dipartimento di studi orientali ) にはほぼ數百點の漢籍が所蔵されている。同治、光緒など清末の刊本がほとんどで、大多數にノチェンティーニの藏書印が捺されてあるから、かつてこの大學で教えた同氏の舊藏書がそのままここに収まったものと思われる。ノチェンティーニは一八八三年から八八年までイタリア外務省の見習い通譯として中國に滞在しているから、その時に購入したものに違いない。ただ現在の學生はほとんどこれらの書物を利用していない様子で、管理も充分に行き届いていないらしいのは残念である。

ナポリ東洋大學 ( Istituto Universitario Orientale di Napoli ) は中國とのつながりが非常に古い。布教聖省から派遣され、一七一一年から一七二三年まで中國に

<sup>12</sup>この図書館の漢籍目録として、古くジュゼッペ・アーゲル ( Giuseppe Hager ) によって *Catalogo de' Libri Cinese della Biblioteca Reale di Milano* が編まれている ( 未刊稿本 )。

滞在した神父マッテオ・リパ( Matteo Ripa 馬國賢, 1682-1745 )によって、一七三二年ナポリに創立された中國人學校( Collegio dei Cinesi )がその起源である。この學校は中國人にカトリック的教育を施し、中國における布教活動を推進するとともに、ナポリ王國の東洋への經濟的進出を支援する目的をもっていた。その後さまざまな變遷を経つつ、イタリアにおける東洋學の教育研究據點として再編され、今日に至っているが、残念なことに、古い漢籍の所藏は少なく、ほぼ五〇點を有するに過ぎない。

その他、大學圖書館ではフィレンツェ( Biblioteca Universitaria di Firenze )、ジェノヴァ( Biblioteca Universitaria di Genova )、ボローニャ( Biblioteca Universitaria di Bologna )にも若干の漢籍が存在する。

フィレンツェにはイタリア統一後まもない一八七一年にイタリア東洋研究協會( Società italiana per gli studi orientali )が組織された。これがその後、東洋學院( Accademia orientale )、アジア協會( Società asiatica )と變遷したが、その藏書が今日フィレンツェ大學に歸している。現在保存されている漢籍類は、滿文書などを併せても三〇點未滿で、すでに散逸したものが多と思われる<sup>13</sup>。やや目を引いたのは崇禎八年刊の『陰符經解』ぐらいである。

ジェノヴァ大學の圖書館にはイエズス會が中國で出版した書物が十數點所藏されている。すべて十七世紀前半の古いもので、それらに混じって萬曆刊の日用類書『格物全書』なども見られる。大學に入った経緯についてはまだ深く調べていないが、イエズス會關係の施設に由來するものに違いない。

ボローニャ大學の漢籍も數量は二〇點に滿たない。ポリグロットとして名高いメツゾファンティ樞機卿( Giuseppe Gaspare Mezzofanti; 1774-1849 )の舊藏である。ただしほとんどすべて漢譯されたカトリック關係書であり、かつ出版年代も十九世紀以降のものである<sup>14</sup>。

最後に研究所及び博物館などの藏書を見ておこう。まずローマにあるリンチェイ學士院の圖書館( Biblioteca dell'Accademia Nazionale dei Lincei e Corsiniana )<sup>15</sup>にはキリスト教關係の漢籍を中心に約二〇點が收藏されている。中には萬曆年間の新賢堂張閩嶽刊の『周易本義』などキリスト教以外の古い書物も少し混じっている。

<sup>13</sup>フィレンツェのアジア協會はワイリー( Alexander Wylie, 1815-1887 )の蒐集した滿蒙藏語文獻を購入したりして、もとは比較的豊富なコレクションをもっていたらしい。L. Nocentini, Sinology in Italy, *Journal of the North China Branch of the Royal Asiatic Society*, New Series, vol. XX(1885), p.161 を見よ。これには邦譯「伊太利における支那研究」『書香』第十五卷第九號(昭和十六年)がある。

<sup>14</sup>メツゾファンティの中國蒐集については以下の專文がある。Andreina Albanese, Indagine preliminare sul materiale cinese e di argomento sinologico del Fondo Mezzofanti della Biblioteca Universitaria di Bologna, *La Benedizione di Babele*, 1991, Bologna, 173-197.

<sup>15</sup>この圖書館は學士院固有の藏書以外に、元コルシニアーナ圖書館( Lorenzo Corsini 後の教皇 Clemente XII( 1730-40 )の藏書を基礎とする )のコレクション、及びカエターニ・コレクション( Sermoneta 公、Leone Caetani の蒐集 )を含むが、漢籍は少しずつどのコレクション中にもある。目録として G. Vacca, *Catalogo delle opere giapponesi e cinesi manoscritte e stampate conservate nella Biblioteca della R. Accademia dei Lincei* (Roma, 1912) がある。

かつてのイタリア中東亞研究所( IsMEO )は、近年アフリカ・東洋研究所( IsIAO: Istituto Italiano per l'Africa e l'Oriente )として再編された。その図書館にも百點に満たない数の漢籍があるが、古い書物は少ない。高名なチベット學者トゥッチ( Giuseppe Tucci )の舊藏書もここに含まれる。

国立ピゴリーニ( 先史民族 )博物館( Museo Nazionale Preistorico Etnografico L. Pigorini )や、地理學協會( Società Geografica )にも若干の漢籍があるが、特筆すべきものはほとんどない。むしろ注目すべきは、ジェノヴァのキヨソーネ美術館( Museo d'Arte Orientale Edoardo Chiossone )である。この美術館には明治のお雇い外國人で、収集家として知られたキヨソーネの日本美術コレクションが集められている。ここに多くの漢籍があるというので、數年前その調査を行ったことがある。美術館ではすべてキヨソーネの舊藏書と考えてきたものであるが、點數にして約一五〇點、計數百冊ある漢籍を逐一見ていくと、どうもこれらはすべてドイツ系アメリカ人のクライヤー( Carl Kreyer 金楷理; 1839-1914 )のものであることが判明した。クライヤーはバプチスト・ミッションの宣教師として中國に渡り、後、江南製造局で翻譯に従事し、さらにベルリンの中國領事館などで勤務した人物である。洋務運動時期に西學書の翻譯家として活躍した外國人として、フライヤー( John Freyer 傅蘭雅; 1839-1928 )、アレン( Young John Allen 林樂知; 1836-1907 )とならんで、その名を残している。この人物の藏書が如何にしてこの美術館に入ったかという経緯については、關係文書が残されていないために一切不明である。しかしこのコレクション中にはクライヤー自身による未刊の譯稿なども含まれており、それなりに興味深い資料といえよう。また必ずしも明かでないこの人物の経歴を知る上でも貴重な材料となる。いずれにせよ、イタリアにある漢籍蒐集の中ではかなり異質の存在であることは間違いない。

このようにイタリアで漢籍を所藏する圖書館を一つ一つ擧げていくだけでも、與えられた紙數ではとても紹介しきれないが、最後に一つだけイタリアらしい例を擧げて小文の締めくくりとしよう。リヴォルノという港町の市立圖書館( Biblioteca Labronica F.D.Guerrazzi, Livorno )で見つけた書物に、「正徳十三年歲在戊寅春 / 黃氏集義書堂校正新刊」という牌記をもつ『類編曆法通書大全』があった。惜しむらくは全三十巻のうち巻二十~三十だけの殘卷であるが、イタリアの漢籍蒐集の中ではもっとも古いものの一つである。もちろんこの圖書館には中國の書物などは、この一點をおいて他には全くないのである。この書物が一體どのようにして今日にまで傳わってきたものかは、頗る興味のあるところだが、それはともかくイタリアという國にはこういう意外な發見の可能性がある。漢籍の世界的な大コレクションの存在は到底考えられないにしても、どの圖書館にも何がしか拾いものの期待がある。